2014年　2月25日

「リュウキュウ藍染め（しぼり染め)」講座　報告書

鼎　丈太郎

講師　大内　一恵先生　吉川好弘（よしかわ工房）
日時　2014年　2月23日（日）
場所　嘉徳集落・よしかわ工房
参加者　31名

目的

瀬戸内町の「山郷（ヤマグン)」と呼ばれる地域では明治末から大正初期にかけて、リュウキュウ藍による藍染めが営まれていた。しかし、現在では自生の藍から作られる藍の染料および藍染めは、嘉徳集落のみで行われている。

今回は現在では貴重となったリュウキュウ藍を使った染色体験を実施することで、リュウキュウ藍の特性や、藍の染料を作り出すまでの工程を学び、瀬戸内町ならではの染色文化に触れる機会の創出を目的とする。

本講座2日目は「しぼり染め」の技法を学び、また1日目に作成した「型染め」の作品とともに、リュウキュウ藍による藍染め体験を行った。

講座内容

１．リュウキュウ藍および藍染めの説明
２．しぼり染めの工程についての説明
　①模様を考え、模様に合わせて布を紐で縛る。または布を折った後、紐で縛る
　②染色（染色3分、酸化3分を1セット、合計染色回数4回）
　③しぼり解き（しぼりは染料が酸化した後に布の紐を解いていく）
　④水洗い（余分な染料を落とす）
　⑤乾燥
３．型染め用の藍染め染色工程について
　①染色（染色時間2分、酸化時間2分を1セット、合計染色回数2回）
　②水洗い（糊を落とす、余分な染料を落とす）
　③乾燥

　※染色時間、染色回数は布の材質や薄さによって調節する。

【リュウキュウ藍について】

リュウキュウ藍について

リュウキュウ藍

【リュウキュウアイ】
キツネノゴマ科イセハナビ属の多年草　　※本土産藍とは異種（本土産藍はタデ科）
生育の北限は北緯 30 度
越冬するが、冬場は葉が小さくなる
「さし木」で増やしていく
元々、嘉徳集落の山間にリュウキュウアイを植えていたが、現在は畑で栽培している
半日蔭の山の中､窪地で良く生育する
収穫の時期は 6 月頃
藍の染料作りは 6 月中旬から開始（1 年分の藍を作る）

【藍の作り方】
材料（500Ｌ容器分）
1 次発酵：水、消石灰
2 次発酵：藍の染料（100 kg）、水あめ（1 kg）、焼酎（1 升）

〈1 次発酵〉
①生葉を水につける
②数日たつと葉以外の不純物を取り去り、消石灰を少し入れる（水分と染料を分離）
③染料が泥状に沈殿すると上澄み液を除き、藍の染料を取り出す

〈２次発酵〉
①染めタンクに泥状の藍の染料、水あめ、焼酎を入れる
②碧（みどり）の液になるまで発酵させる
　※碧（みどり）の液にならないと藍色に染まらない

【しぼり染め】

しぼり染め工程について

染色

酸化、しぼり解き

水洗い

乾燥

※染色時は布に長い紐をつけ、木の棒を使い
　染めタンクに布を浸していく
※絞りは模様に応じて、染色⇒酸化後に紐を
　解いていくと、藍の発色に変化を生む
（模様によって２回目の酸化後、３回目の
　酸化後等、紐を解く順番を変える）

【リュウキュウ藍の発色について】

　白いハンカチを藍の染料に浸した後、引き上げてすぐのハンカチの色は碧（みどり）色を呈している。しかし染色後、一定時間布を引き上げ続けると、藍の成分が空気中の酸素と反応し酸化する。すると、ハンカチの色は碧（みどり）色から藍色へと変化していく。

【型染め】

染色・１回目

酸化・１回目

染色・２回目

酸化・２回目

糊落とし

乾燥

※型染めでの染色は、ハンカチをゆっくり染料に浸し、ゆっくり引き上げる。
（ハンカチをゆすると防染糊がふやけてはがれてしまうため）
※酸化を促す際は、染料液ギリギリのところでハンカチの高さをキープして持つようにする（染めムラ防止のため）。